

ニーチェにおける人間と真理

笹澤豊

「真理とは何か」という問いは、これまで様々な哲学者によって問われ、様々な解決を試みられてきた「古くして有名な問い」である。だがこの問いに「人間にとって」という言葉を付け加えると、問いの意味あいはいくく変わってしまう。「人間にとって真理とは何か」と問うとき、我々はこの問いによって、「真理とは何か」という先の問いが発せられる次元そのものを越えてしまっている。この問いは、何が「真理」であるかとされるにせよ、およそ「真理」なるものが人間にとっていかなる意味をもつのか、と問い、かく問うことにおいて、「真理」を問う求めざるをえない人間の根源的欲求そのものを問題にするからである。

このような問いを問うたのは、ニーチェであった。「また新しい問題が存在する。それは真理の価値に関する問題である。——真理への意志は批判を必要とする——我々はここで我々自身の課題を次のように規定しよう——真理の価値は試みにひとたびは問題にされるべきである、と……」⁽²⁾こうしてニーチェは、「真理とは何か」と問う前に、「人間の真理とは結局のところ何なのか」と問い、「我々のうちにあつて『真理へ』と意志しているのは一体何なのか」と問うのである。——小論の意図は、この問いをニーチェとともに問うことにあるが、そのために我々は何よりもまず、彼の初期の未公開の論文「道徳外の意味における真理と虚偽について」を取り上げねばならない。この論文は、ニーチェが真正面からこの問題に取り組んだ最初の論文であるというだけでなく、彼が集中的かつ主題的にこの問題に取り組んだほとんど唯一の論文でもあり、⁽⁵⁾また、その問題の重大性において、以後のニーチェの多岐にわたる思想展開の一本の太い方向線を定めるものと考えられるからである。

一

論文「道徳外の意味における真理と虚偽について」(以下、『真理と虚偽』と略記)においては、∧真理∨に関する問いは、「このような情況のもとで真理への衝動は一体何処から生じたのか⁽⁶⁾」という問いの形をとって問われている。ここで、「このような情況」とあるのは、人間存在と知性との関係にまつわる或る根源的な情況のことであり、この問いに疑問符ではなく感嘆符が用いられているのは、ニーチェがこの情況を、およそ「真理への衝動」など生じうべくもない情況と見なしているからである。ニーチェによれば、人間は、他の動物とは違って、生存闘争のために固有の身体的武器をもたない。「きわめて不幸な、デリケートな、はかない存在者⁽⁷⁾」である。このような存在者にとっては、唯一の生存手段となるのは「偽装 (Verstellung)」の技術であり、これを事とするものが「知性」にほかならない。⁽⁸⁾すなわち知性は、人間の生存のための「補助手段」となるべきものであり、その「最も一般的な作用」である「欺瞞」の技術を駆使することにおいて、「個体維持のための手段」としての己れの役割を果たすのである。⁽⁹⁾知性は神的なものではなく、あくまでも「人間的なもの」である。知性は、人間というはかない無常な存在者を「一瞬のあいだ生存のうちに繋ぎとめておく」ためにこの存在者に添えられた「添え物」であって、宏大な宇宙の片隅でやがてこのはかない存在者とともに消滅してゆく「哀れで、影のように不確かで、束の間の」ものにすぎず、決して永遠のものではないのである。——ニーチェが先の問いのなかで「このような情況」と呼んだものは、このような人間存在とその知性との姿であった。そうした把握を携えて彼は、「真理への誠実で純粋な衝動がいかにして人間のあいだに生じたのか、これほど理解し難いことはほとんどない⁽¹⁰⁾」と述べるのである。というのも、知性が人間の生存のために最高の「偽装術」である「欺瞞」を事とするものであるなら、そこには「真理」が問題とされる余地など全く存在しないからである。むしろ知性は、己れの主人たる人間から独立するとき、その本性のしからしめるところとして、「人間の眼と感官とに眩惑的な霧をかけ⁽¹¹⁾」、「真理」への通路を遮ってしまう。

ここで注意しなければならないのは、ニーチェが「だから真理への衝動などは存在しないのだ」と言おうとしているのではないということである。真理の探究に携わる諸学問が現に存在する以上、「真理への衝動」は紛れもなく存在する。ニーチェにとってそれは疑いようのない事実であった。だからこそ彼は、「このような情況のもとで、真理への衝動は一体何処から生じたのか」と問うのである。

さてこの問いに対して、ニーチェは単刀直入に次のように答えている。すなわち、個としての人間は、「事物の自然状態」においては、知性の「偽装」の技術を自己保存の手段として、他の諸個人に対抗しつつ生きているが、「人間は同時に必要に迫られ、また退屈のぎから、社会

的に、畜群のように群れをなして生存しようとするものであるから、何らかの平和条約の締結を必要とし、まことに荒々しい八万人に対する万人の戦いVを少なくとも自分の世界からは消し去ろうと努力する。しかるにこの平和条約の締結が、あの謎に充ちた真理衝動の達成への第一歩とおぼしきものを必然的に伴うのである。すなわち、今後「真理」であるべきだとされるものが、今や固定されるのである（……）⁽¹²⁾」

見られるように、ニーチェの論述は、ホプズの自然法論を援用しつつなされている。ニーチェの独自性が見られるとすれば、それは、ホプズが社会契約の成立を見るところに、彼が「真理衝動の達成への第一歩」を見ている点である。目をとめねばならないのは、彼がこの「真理衝動の達成への第一歩」を、「今後「真理」であるべきだとされるものが固定される」という事態において成立するものとしていることである。彼は「真理への衝動」の充足の端緒を、「真理」であるべきだとされるもの」の固定化に存するものとし、「真理」の発見に存するものとはしていないのである。このニーチェの把握は、彼が「真理への衝動」の根底に、人間の自己保存の衝動を——絶えず各人を生存の危機に瀕せしめる荒々しい「自然状態」に終止符を打とうとする各人の衝動を見るところから由来している。「真理への衝動」が人間の自己保存の衝動を出自としているかぎり、この「真理への衝動」が求めるものは人間の生存にとって有用なもののみであって、この衝動にとっては、これこそが「真理」としての価値をもつ。すなわちこの衝動は、「生命を維持する快適な諸結果⁽¹³⁾」を伴うものを「真理」であるとして固定化し、逆に「厭わしい敵意に充ちた諸結果⁽¹⁴⁾」を伴うものを「虚偽」として斥けるのである。

ここで、ニーチェが二種類の真理概念を提示していることを確認しておきたい。先に触れたように、ニーチェは、知性が「人間の眼と感官とに眩惑的な霧をかけ」、「真理」への通路を遮ってしまう、としている。知性が生み出す「幻影や夢の像」に阻まれる結果、「人間の感覚は決して真理には至らない⁽¹⁵⁾」のである。ここで言われる「真理」とは、彼が「事物の本質」或いは「根源的実在態⁽¹⁶⁾」と呼ぶものと人間との一致を意味しているが、「真理への衝動」が求めるものを彼がこの種の「真理」——これをA真理(I)Vとする——であるとは考えていないことは、すでに明らかであろう。彼の理解に従えば、この衝動が「真理」であるとは見なすもの——これをB真理(II)Vとする——は、あくまでも人間の集団の生存に有用と見なされるものである。それゆえこの衝動は、A真理(I)Vが無効なものであるかぎり、これには全く「無関心」であり、また、それが有害なものである場合には、これに対して「敵意すら抱く⁽¹⁷⁾」のである。

一一

「真理への衝動」とは人間の自己保存の衝動の集団的生存の場における発現であり、一種の社会規範の確立を求める衝動であって、この衝動が求めるもの—— \wedge 真理(II) \vee ——は、「事物の本質」ないし「根源的實在態」との一致—— \wedge 真理(I) \vee ——ではない、というのがニーチェの基本的な了解であった。論文「真理と虚偽」は、ここから更に歩を進めて、原理的なレベルで、 \wedge 真理(II) \vee がいかにも \wedge 真理(I) \vee とは合致しえないものであることを示そうとしている。

論述の眼目は、言語に関わっている。ニーチェによれば、 \wedge 真理(II) \vee は「真理」であるべきだとされるもの「の固定化によって成立するものであるが、この固定化をなすものは言語であって、ここにおいて初めて「真理」と「虚偽」とが明確に区別され、その境介が定められるのであり、それゆえ「真理」(II)の最初の法則を与えるのは言語の立法である」と言われねばならない。⁽¹⁸⁾

そこでニーチェは、言語がそもそも \wedge 真理(I) \vee の現前化の手段たりうるものなのかどうかを問題にし、「言語はあらゆる實在の十全な表現であるのか」と問いつつ、次のような論を展開している。すなわちニーチェによれば、言語(Sprache)の構成要素となる語(Wort)とは、「音における神経刺激の模写」⁽¹⁹⁾、つまり客観によって与えられた神経刺激が音において表現されたものであり、語の形成は、(1)「或る一つの神経刺激がまず一つの形象に移され」、(2)「この形象がふたたび或る一つの音において模造される」という二つの過程から成り立っている。しかしこれらの過程は、いずれも必然性を伴ったものではなく、それぞれが一つの「隠喩」⁽²⁰⁾以上のものではない。そこには「全く別種の、新しい領域のまったただなかへの、領域の完全な跳び越し」⁽²⁰⁾が介在している。

しかも「領域の完全な跳び越し」は、実はこれにとどまらない。以上の二つは主観内部における「跳び越し」であるが、ニーチェによれば、そもそも主観と客観とが全く別種の隔絶した領域であって、それらの間には何ら必然的な関係は成立しえない。「主観と客観というような絶対的に異なった二つの領域の間には、いかなる因果性も、いかなる正しさも、いかなる表現もない」⁽²¹⁾のである。⁽²²⁾

「言語はあらゆる實在の十全な表現であるのか」という問いに対するニーチェの答えは、もはや明らかであろう。この時期の彼の理解は、「物自体という謎に充ちたXが、(a)まず神経刺激として、(b)次に形象として、(c)最後に音として、取り出される」というものである⁽²³⁾

が、(a)、(b)、(c)の移行のいずれにも必然性を認めないニーチェにとって、言語は、「事物の本質から由来したのではなく」「根源的実在態には徹頭徹尾一致しない⁽²⁴⁾」ような「事物の隠喩」に他ならないのである。

さてそうであれば、 \wedge 真理(II) \vee が言語にその成立の場をもつものである以上、やはりこの \wedge 真理(II) \vee も、 \wedge 真理(I) \vee からは隔たった「事物の隠喩」以上のものではないということになる。 \wedge 真理(II) \vee とは、「永い間の習慣によって、或る民族にとって確固たるもの、規範的なもの、拘束力をもつものと思われる」ような「隠喩、換喩、擬人観の可変的な一大群⁽²⁵⁾」であり、 \wedge 真理(II) \vee を規範にして生きるということとは、「慣習的な隠喩を使用する⁽²⁶⁾」ことにほかならない。しかし、 \wedge 真理(I) \vee こそが \wedge 真理 \vee であるとすると観点からすれば、 \wedge 真理(II) \vee は \wedge 虚偽 \vee 以外の何ものでもなく、 \wedge 真理(II) \vee を規範として生きることが、「確固たる因襲に従って嘘をつくこと⁽²⁷⁾」にほかならないのである。それにも拘らず \wedge 真理(II) \vee に対して「真理の感情」が抱かれるのは、 \wedge 真理(II) \vee の形成にまつわったこととした事態が、忘却され、人間の無意識の深層へと没し去っているからである。「真理(II)」とは、それが幻影であることが忘却されてしまった幻影、使い古されて感性的には無力になってしまった隠喩、肖像が消えてしまってもはや貨幣としてではなく金属と見なされるようになった貨幣である⁽²⁸⁾」。

\wedge 真理(II) \vee は、その由来からの乖離をその不可欠の成立条件としている。だがそれは、その由来の忘却が \wedge 真理(II) \vee の虚偽性の隠蔽のために不可欠である、という意味においてだけそうなのではない。この乖離は、実は \wedge 真理(II) \vee の普遍妥当性がもたらされるために不可欠のものであり、それゆえこの乖離は、 \wedge 真理(II) \vee が形成される過程そのものなかであらかじめ行われている。「隠喩、換喩、擬人観の可変的な一大群」が「万人に対して拘束力をもつ」ような「確固たる、規範的な」ものとなる過程そのものが、隠喩の脱隠喩化の過程にはかならないのである。というのも、元来が感性的・直観的なものである隠喩は、ニーチェによれば、すべて個人的なものであり、そのままではとうてい普遍性をもちえないものであって、そこに普遍性をもたらすには、「直観的な隠喩を一つの図式へと昇華させ、形象を概念へと解消させる⁽²⁹⁾」という過程が必要になるからである。この脱隠喩化の過程、すなわち「概念の形成⁽³⁰⁾」の過程は、諸々の直観的隠喩の個性的な差異が捨象され、それらが同等化される過程である。概念は、それが「個性的で現実的なものの無視」と「等しくないものの等置⁽³¹⁾」によって成立するものであるからこそ、「無数の、多かれ少なかれ類似した事例に、すなわち厳密に考えれば決して等しくはない、それゆえ全く不同の事例に適合する⁽³²⁾」ような普遍妥当性をもちうる。そして、まさにこのことによって、概念は、それらの事例の「原型⁽³³⁾」とも見なされ、規範的な効力を獲得するので

ある。

こうしてニーチェによれば、 \wedge 真理(II) \vee とは、隠喩に由来しつつ、しかもその脱隠喩化によって形成される「諸概念の構築物」⁽³⁴⁾にはかならない。それゆえ \wedge 真理(II) \vee は、それがいかに「確固たる、規範的な、拘束力をもつ」ものであっても、所詮は「事物の本質」とは無縁の「幻影」にすぎない。脱隠喩化の過程も、 \wedge 真理(II) \vee が「幻影」であるという性格を拭い去るものではない。むしろこの過程は、「等しくないもの等置」というきわめて主観的な操作によって、 \wedge 真理(II) \vee を「隠喩の世界」以上に客観(事物)から遠ざけてしまっている。したがって「諸概念の構築物」としての \wedge 真理(II) \vee に関して、次のように言われねばならない。「真理(II)とは、徹頭徹尾人間の姿をしたものであって、人間を度外視して『それ自体で真』であり現実的であり普遍妥当的であるような、たったの一点すらをも含んでいない」⁽³⁵⁾と。

三

古来、学問の研究者という名の数多くの「真理の探究者」が存在した。こうした真理探究の営為は今後も絶えることはないであろうが、「真理への衝動」の存在の証左でありその純粋な発現とも言えるそうした人間の営みは、ニーチェの以上のような真理観のもとで、どのようなものとして捉えられるであろうか。

ニーチェの答えは明快である。すなわち、諸学問における \wedge 真理 \vee の探究の営みとは、きわめて人間的なものである。「限りなく複雑な概念のドーム」⁽³⁶⁾——すなわち \wedge 真理(II) \vee ——を構築し、そのなかに全経験世界を組み入れる営みであって、「真理の探究者」が求めているのは、「世界を人間に変形すること」すなわち「世界を或る人間的な種類の事物として理解すること」⁽³⁷⁾にはかならない。つまり諸学問が「真理の探究」という名において行なっているのは、世界のうちに自らが案出した諸概念の網を投げ入れ、それによって世界を解釈する、という営みなのである。それゆえ、学問的認識の遂行において \wedge 真理 \vee が発見されたとしても、それは何ら感嘆するには当たらない、とニーチェは言う。「もし誰かが或る物を茂みの後ろに隠しておいて、それをちょうど同じところで再び探し出し見出したとしても、このような探索や発見はそれほど誇るべきことではない。しかし理性の圏域内での『真理』の探索と発見とは、そういったものである」⁽³⁸⁾すなわち「真理の探究者」は、自分自身が案出し、世界のうちに投げ入れた諸概念の網に出会うにはすぎないのである。

留意すべき点は、ここでニーチェの言う「学問」が、いわゆる形而上学のような思弁的な学問に限られるものではないということである。彼の見地からすれば、実証的な学問とされる自然科学においても、事情は同様である。自然科学者は「自然の合法性」を確信し、それを自然のうちにならんと発見してゆくことを自らの使命としているが、この「自然の合法性」もニーチェからすれば、彼ら自身が自然のうちに入れた諸概念の「堅固な規則性」⁽³⁹⁾にはかならず、そのようなものとして「最高度に主観的な形成物」⁽⁴⁰⁾なのである。「星の運行や化学のプロセスにおいてかくも我々に感嘆の念を起させる合法則性は、すべて、我々自身が諸事物に添える諸特性と根本において合致している。だから我々は、実はそれをもって自分自身に感嘆の念を覚えているのである」⁽⁴¹⁾。

ニーチェが言おうとしているのは、自然科学をも含め、総じて「理性の圏域内での『真理』の探索と発見」が実在そのものの把握に、つまり「真理(Ⅰ)Ⅴ」の開示につながるものではないということである。ここでは人間は、いわば鏡を覗き込んでいるにすぎないのである。⁽⁴²⁾

ここで我々は、ニーチェが諸学問を無用のものとして斥けようとしていると思いついてはならない。むしろ彼は、学問の、全経験世界を概念的秩序のうちに組み入れる営為を、人間の生存に必要不可欠のものと考えている。というのも、「概念のドーム」⁽⁴³⁾を築き上げるそうした営みは、「我々の生きうる世界をしつらえる」⁽⁴³⁾営みだからである。人間は、「自分の生を理性とその諸概念に結びつける」⁽⁴⁴⁾ことをしなければ、「一回限りの、徹底的に個性化された根源的体験」⁽⁴⁵⁾という「流水」⁽⁴⁶⁾によって「押し流され」「自分自身を見失って」⁽⁴⁷⁾しまうであろう。それゆえ、もし人間存在に意義が見い出されるならば、学問の営為にもそれなりの存在意義が認められねばならない。たとえ「学問的真理」が「真理(Ⅰ)Ⅴ」には徹頭徹尾合致しないものであるにしても、それは「困窮した人間がそれにしがみついて生涯わが身を救っている(……)巨大な木組みや板囲い」⁽⁴⁸⁾なのである。

四

以上のような見地は、たとえば「真理」とは、それなくしては或る生物(Ⅱ人間)が生きていることのできないような誤謬である⁽⁴⁹⁾といった見解として、ニーチェの後年にまで貫かれる見地である。だがここで、次の点が問題になる。すなわち、「真理(Ⅱ)Ⅴ」を「誤謬」或いは「幻影」と断ずる場合、その規準となるものは何か、ということである。論文『真理と虚偽』の言葉を用いれば、この規準は「事物の本質」ないし「根源的

実在態」との一致、つまり \wedge 真理(I) \vee ということになるであろう⁽⁵⁰⁾。しかし問題は、ここでニーチェがこの「根源的在態」を「我々にとっては近づき難い、定義しえないX⁽⁵¹⁾」或いは「物自体という謎に充ちたX⁽⁵²⁾」として捉えていることである。「根源的実在態」がそのようなものであるとするなら、それとの一致・不一致を語ることはそもそも可能なのか。「根源的実在態」が「我々にとっては近づき難い」「謎に充ちた」ものであるとすれば、 \wedge 真理(I) \vee は我々人間にとっては現前しない、ということになるであろう。だがそうであれば、 \wedge 真理(II) \vee を「誤謬」或いは「幻影」と断ずることは、 \wedge 真理(II) \vee の真理性が「存在していない、規準によって測定され⁽⁵³⁾」ることを意味し、したがってそれは「全く無意味である⁽⁵⁴⁾」と言われねばならないことになる。

この点との関連で興味深いのは、『真理と虚偽』の前半部に見られるニーチェの次のような見解である。すなわち、人間の感覚は、知性の産み出す「幻影と夢の像」に遮られる結果、「ただ事物の表面上をすべりまわる⁽⁵⁵⁾」だけで、事物の本質を見ることはできない。事物に関する人間がこうした知 \parallel 無知は、自己自身に対しては、自己の表面である「意識」への知の局限と、自己の「身体」の度外視となって現われる⁽⁵⁶⁾。「自然は人間に、自分の身体についてすらも、大部分のことを秘して語らないではないか。その結果自然は人間を、(……)尊大なベテン師的な意識の中に封じ込めてしまうのだ！自然は鍵を投げ棄ててしまったのである⁽⁵⁷⁾」注目すべきは、このすぐ後に続く次の文章である。「一度でも隙間を通して、意識の部屋から外を、また下を見たいと願う宿命的な好奇心、そして、人間は、無慈悲なもの、貪欲なもの、飽くなきもの、残忍なものの上に安らっており、自分の無知から来る無関心のなかで、いわば虎の背中に乗って夢を見ているのだ \vee 」ということを今や予感した宿命的な好奇心は、禍いなるかな⁽⁵⁸⁾。

ここで、「意識の部屋」の外部および下部を見ようとする知的関心が「宿命的」(verdinglichend)なものであるとされるのは、それが人間の生存の保護膜とも言うべき「幻影と夢の像」の彼方に人間を連れ出そうとするからである。知性のそうした「眩惑的な霧」の向こうにこの好奇心がおぼろげに見るとされる「無慈悲なもの、貪欲なもの、飽くなきもの、残忍なもの」こそ、ニーチェが「事物の本質」或いは「根源的実在態」と見なすものにほかならない。ここでニーチェは、ショーペンハウアーが「盲目的な、とどまることのない衝動」、「目標もなく終末もない趨勢」であるとする「物自体」としての「意志」のことを考えていたのかもしれない⁽⁵⁹⁾。興味深いのは、ニーチェが同時期の『書かれなかった五つの書物のための五つの序文』の「1.真理のバトスについて」のなかで、『真理と虚偽』におけるのとほぼ同様の表現を用いつつ、そうした「宿

命的な好奇心」を「哲学者の好奇心」であるとしていることである。「人間をそのまま〔虎の背中に〕乗せておけ」と呼びかけるのは芸術である。「人間を覚醒させよ」と真理のバトスに駆られて呼びかけるのは哲学者である。⁽⁶⁰⁾

ニーチェの芸術に対する見解にはきわめて複雑で微妙なものが見られるから、この点に関しては別稿に譲ることとし、問題を「哲学者」に限定して考えれば、ここでは哲学者は \wedge 真理(I) \vee を開示しようとする者として捉えられていると言ふことができよう。だがニーチェは、この文章に続けて、次のように書かねばならなかった。「しかしながら、その哲学者自身が、眼れる者を揺り起こしていると信じているもの、さらに深い魔術的なまどろみの中に落ち込むのである」。⁽⁶²⁾

何ゆえに哲学者は、 \wedge 真理(I) \vee への「宿命的な好奇心」にとらわれつつも、畢竟これを開示しえないとされるのか。「理念」や「不死」について語る哲学者に対するニーチェの決定的な不信の念をここに見ることも可能であろう。⁽⁶³⁾だが、そのような哲学者に替わる新たな哲学者の可能性に彼が思い及んでいないのは、「哲学者」としてのニーチェ自身が、まだ \wedge 真理(I) \vee への方法的な通路をもちあわせていないからである。むしろ彼は、この時期の理論構成によって、この通路をあらかじめ断ち切ってしまったというのも、すでに触れたように、この時期の彼は「我々にとっては近づき難い」「謎に充ちた」「物自体」を「根源的実在態」と見なしているからである。

だが、やがてニーチェは、 \wedge 物自体—現象 \vee という思考形式そのものを全面的に撤回することになる。一八七六/七七年の断片において彼は、ショーペンハウアーにことよせて次のように書いている。「物自体と現象とが決定的に対立しているように思わせているのは、知性の様々な誤った根本把握である。(……)始めから受け継がれた知性の非論理的悪習が、はじめて物自体と現象との間に完全な裂け目をつくったのである。この裂け目は、我々の知性とその誤謬が存続するかぎりにおいてのみ存続する」⁽⁶⁴⁾ここに見られるのは、「我々にとっては近づき難い」「物自体」というカント的な概念そのものが一種の虚構(II \wedge 真理(II) \vee)に属するものである、とするニーチェの捉え返しである。さらに一八八五年の断片においては、次のように言われる。「わたしの理解するかぎりでは、仮象が事物の現実的で唯一の実在性である(……)。わたしは「仮象」を「実在性」と対立するものとは考えず、むしろ逆に、仮象を実在性として、すなわち想像上の「真理の世界」への変質に抵抗する実在性として考える。もしこの実在性に特定の名称を与えるとすれば、それは「権力への意志」ということになるであろう」。⁽⁶⁵⁾

今やニーチェは、一切を、様々な遠近法的評価によって成立する「仮象」であるとしつつ、⁽⁶⁶⁾その背後に「物自体」を想定する見地を斥け、む

しるこの「仮象の世界」こそを唯一の实在と見なして、これを「権力への意志の形態学と進化論」⁽²³⁾の展望のもとに捉えようとするのである。ニーチェの「権力への意志」理論の展開に関しては別稿において論じなければならないが、以上の考察との関連からひとつ言えること、それは、このときへ真理(I)∨はもはやへ真理(II)∨から隔絶したものである⁽²⁴⁾。ここではへ真理(I)∨は、へ真理(II)∨の生成に関する考察を通して露呈される生の光景を意味しているのである。

(註)

ニーチェのナクストは Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe in 15 Bänden, hrsg. v. G. Colli u. M. Montinari を用い、引用に際してはその巻数をローマ数字で記した。

- (1) Kant, Kritik der reinen Vernunft, A58=B82.
- (2) Zur Genealogie der Moral, V, S. 401.
- (3) Die fröhliche Wissenschaft, III, S. 518. 傍点を引用者による。
- (4) Jenseits von Gut und Böse, V, S. 15.
- (5) ニーチェは同時期、「真理のメタメタ」という短い文章を書いている。ここでも「人間にとって真理とは何か」という問いが問われているが、この問題場面における彼の論述は、或る若干の点を除いて、「道徳外の意味における真理と虚偽について」と表現までが同じである。なおこの点については、のちの頁で触れる。
- (6) I, S. 877. (7) I, S. 876.
- (8) 上の見地は、ニーチェの終年を見れば。Vgl. XII, S. 550.
- (9) I, S. 876. なおニーチェの「解決」は「ニーチェの終年」の終章を指す。Vgl. Schopenhauer, Die Welt als Wille und Vorstellung, Erster Band §27, Sämtliche Werke, hrsg. v. A. Hübscher, Wiesbaden 1966, Bd. 2, S. 181.
- (10) I, S. 876. (11) ibid. (12) I, S. 877. (13) I, S. 878. (14) ibid. (15) I, S. 876. (16) I, S. 879. (17) I, S. 878.
- (18) I, S. 877. (19) I, S. 878. (20) I, S. 879. (21) I, S. 884.
- (22) Vgl. Schopenhauer, op. cit. §5, S. 16.
- (23) I, S. 879. (24) ibid. (25) I, S. 880. (26) I, S. 881. (27) ibid. (28) I, S. 880f. (29) I, S. 881. (30) I, S. 879.
- (31) I, S. 880. (32) I, S. 879f. (33) I, S. 880. (34) I, S. 886. (35) I, S. 883. (36) I, S. 882. (37) I, S. 883. (38) ibid.

- (8) I. S. 882. (9) I. S. 885. (14) I. S. 886. (21) Vgl. IX, S. 308f., 311, 637, XI, S. 622.
- (2) Vgl. Die frühliche Wissenschaft, III, S. 477.
- (14) I. S. 886. (15) I. S. 879. (16) I. S. 882. (17) I. S. 886. (22) I. S. 888.
- (23) Nachgelassene Fragmente 1885, XI, S. 506.
- (24) Vgl. W. Müller-Lauter, Nietzsche. Seine Philosophie der Gegensätze und die Gegensätze seiner Philosophie, Berlin 1971, S. 100, M. Heidegger, Nietzsche, 2 Bde, Pfullingen 1961, Bd. I, S. 512f., 620f.
- (18) I. S. 880. (25) I. S. 879. (26) I. S. 884. (27) *ibid.* (28) I. S. 876.
- (19) 「義理は表面をなせむ」として「大なる理性」としての「肉体」を重視する見地が、すでにあり見込める。Vgl. III, S. 593, IV, S. 39, VI, S. 294, X, S. 284f., 293, XI, S. 565f., 576f., 635, XII, S. 26.
- (25) I. S. 877. (29) *ibid.*
- (26) Schopenhauer, op. cit. § 54, S. 323, § 58, S. 378.
- (29) I. S. 760.
- (12) Vgl. Heidegger, op. cit., S. 82 ff. J. D. Arras, Art, Truth, and Aesthetics in Nietzsche's Philosophy of Power, in: Nietzsche-Studien Bd. 9, 1980, S. 239ff. (30) I. S. 760.
- (30) ショーペンハウアーが「醜相(ヤクソフ)としての醜(ウツシカ)を考へたは、むしろショーペンハウアー批判を読み取ることに可能である。Vgl. Schopenhauer, op. cit. § 49, S. 275 ff. など『志願の誕生』と『ショーペンハウアーに対するニーチチの対立が現われてくる』とする見解がある。
- G. Goedert, Nietzsche und Schopenhauer, in: Nietzsche-Studien Bd. 7, 1978, S. 2.
- (31) VIII, S. 447. (32) XI, S. 654. (33) Vgl. XIII, S. 370f. (34) Jenseits von Gut und Böse, V, S. 38.
- (35) 「權力の意志」と「親切性」の思想のちがいを、表注の6<1>教へるの裏面観をそのなかに抽出の意図を認むるならぬであろう。cf. R. H. Grimm, Nietzsche's Theory of Knowledge, 1977, p. 61 ff. K. Hilpert, Die Überwindung der objektiven Gültigkeit. Ein Versuch zur Rekonstruktion des Denkansatzes Nietzsches, in: Nietzsche-Studien Bd. 9, 1980, S. 104 ff.

Der Mensch und die Wahrheit bei Nietzsche

Yutaka SASAZAWA

In diesem Aufsatz behandle ich das Wahrheitsproblem bei Nietzsche, das als die Frage nach dem Wert der Wahrheit für den Menschen von ihm erwogen wird. Dazu beschäftige ich mich mit der Problematik von Nietzsches unveröffentlichtem Essay „Über Wahrheit und Lüge im außermoralischen Sinne“, in dem er sich mit diesem Problem nicht nur zum erstenmal, sondern auch am konzentriertesten befaßt hat.

In diesem Essay sucht Nietzsche nach der Herkunft des „Triebs zur Wahrheit“, und er führt diesen auf den Selbsterhaltungstrieb des Menschen zurück. Meiner Meinung nach muß man hier zwischen zwei Wahrheitsbegriffen unterscheiden, mit denen Nietzsche arbeitet: Wahrheit (I) als Übereinstimmung des Menschen mit „dem Wesen der Dinge“ oder „den ursprünglichen Wesenheiten“, und Wahrheit (II) als Nützlichkeit für die Erhaltung des menschlichen Lebens. Nietzsche rechnet das, was der Trieb zur Wahrheit sucht, zur Wahrheit (II), und erklärt diese darin für Lüge, weil diese nichts als Metapher der Dinge ist, die den ursprünglichen Wesenheiten ganz und gar nicht entspricht. — Aber in Nietzsches Konzeption findet sich eine Schwierigkeit: denn hier sieht er die ursprüngliche Wesenheit als „das rätselhafte X des Dinges“ an. Wenn die ursprüngliche Wesenheit ein für uns unzugängliches X ist, so ist es uns durchaus unmöglich, von der Übereinstimmung damit zu sprechen. Also offenbart sich uns Wahrheit (I) nicht, die als Maßstab für die Prüfung der Wahrheit (II) dienen könnte.

Doch gibt Nietzsche bald die Denkweise „Ding an sich - Erscheinung“ als solche auf und betrachtet das Problem nur noch vom Standpunkt des Perspektivismus aus. Dabei erscheint die Wahrheit (I) nicht als Gegensatz zur Wahrheit (II).